

「東京地震速報1」 李 修京教授が経験した日本地震の状況

この文は現在日本東京在中の東京学芸大学の 李 修京教授が地震の現場で経験した現場期を感動的な事情とともに送ったものです。危急な状況で感じられる人間愛をこの教授は国籍を超えお互いに助けられることができるということに大きい感銘を受けて、韓国の国民にも日本に助けの手助けを出してくれるのを訴えています。

筆者は今東北関東大地震の多くの犠牲者たちを哀悼する心と、私を心配して一緒に涙を流してくれたすべての人々に感謝の言葉を申し上げたいと思います。そして人類最悪の試練に献身的な**ボランティア活動**をしていらっしゃるすべての方々に感謝の心にこの文を書きます。

3月11日12時、筆者は先月日本で出版された書籍のミーティングで小松電機株式会社の小松昭夫会長と図書新聞社の立原局長と一緒に東京浜松町にある国際貿易センター39階のレインボーレストラングで昼食を食べた。



39階のレストランに入ったら開けた空間にガラス窓の向こうに東京湾の全景と一緒に若者に人気のあるお台場や富士テレビなどが一目に入って来て空の雲と穏かな海と現代式建築物が本当に美しく2年ぶりに会う小松会長と立原局長と食事をして出版物の内容の今後の方向を論じた後、立ち上がろうとした瞬間、急に建物が下上で動くような揺れを感じた。

地震だと思って“地震ですね”と笑いながら言ったが今回は横揺れが段々強くなった。私達はまず、テーブルの端っこを端っこを掴んだ。ところが、厨房からお皿が割れる大きな音が聞こえた。その瞬間、テーブルの上のお皿とコップが落ち始めたし、仲間たちとテーブルの下に隠れたが、“これは冗談じゃない、ここまで大きな揺れは初めてだ。と言いながら、

テーブルから離れて建物の中のほうに行くようにした。

建物自体が揺れたので、私は逃げる方向を探したが自分の意思とは逆に窓ガラスのほうに流された。

外に見えるお台場の名物のフジテレビの裏から黒い煙が出始めた。

“何か起きたんだろう”と不安とともに広々としたレストラン全体が揺れたのでどうすればいい判断力を失った。その瞬間、従業員スタッフが「窓側に近づくと危ないですからこちらにいらっしやってくださいと中のほうに呼んだ。そうだ、この窓ガラスこそ最悪の凶器に変わっていくのだ。

揺れるビルの39階にいる状況で理性的に行動するのは難しかった。さらに、私は1923年9月1日の関東大地震の混乱を研究してきたし、1995年の関西地方の神戸阪神大地震を現場経験してきたもので精神的なトラウマでますます気を失って行ったのだ。

高層ビルの空中での恐怖、建物が揺れ、窓ガラスが割れたらすべてが終わりだというプレッシャーと不安の極致、ため息をついて、倒れる女性、止まったエレベータ、私も体が震えた。ここでこの建物が崩壊されたら全てが終わりだと思ったら、立ち上がれなくてべたりと座りこんでいたら従業員が来て自分を抱きしめて“大丈夫、大丈夫です”と言いながら私を安心させる。きっとこの従業員も怖がっていると思うけど、職業精神で私を心配してくれて、そばにいてくれた。

こんな状況で私は彼女の思いやりがどれだけありがたい行動なのか考える。

人の情を感じてしばらく安心したが建物がますます強く揺れたら、911事件の時に無くなったニューヨークの国際貿易センタービルを思わせるのに充分だった。9.11じゃなく3.11だったがこのビルも「国際貿易センター」という名前だったので悪い方向にしか考えられなかった。

人々が右往左往している姿を見たら、ここにはいけないと考えた。

マネージャーはここで待ったほうが良いと言ったが、我々はまず、非常階段を探し、地上におりると決めた。私は仲間に助けを受けて恨めしいくらいの終わりの見えない険しい非常階段を震えながらおりた。途中で壁を見たら、壁の面が落ちていたし、建物の多い部分がひび割れた。下の階で応急ボックスを持つてのぼる救急隊員も見えた。

「あ！ただの悪い夢じゃないんだ。」という考えとともに、螺旋系の39階の階段を震える足とともに地上におりたが、仲間は私と救急車とパトカーが走り、他の車が渋滞している広い道路の真ん中の分岐点につれていった。大きな振動で高層ビルが倒れる場合窓ガラスの破片が凶器になるため、都市の街中がいくら危ないところか、痛感する。しばらくの後、仲間と私は建物が崩壊される場合の派編の心配で安全な場所に移動した。

「1篇に続く」

結局、警察に聴き近い避難所に行くことにした。「新橋生涯学習センター」に案内され、入ったらすでに大勢の人々がいた。日本を動かす政府官庁の霞が関の職員が多くはスーツの姿だった。区の職員が出て毛布と乾パンと5年保存可能な水を配っていた。2階と3階は暖房がきいたけど、椅子に座ったままだし、4階は体育館で横になるのができたが、暖房がきかなかった。最初は夜中の4時30分まで2階の椅子に座って夜をすごした。



芝大神宮の前には既に大勢の人々が集まって携帯電話に入って来る緊急地震情報を見ていた。19236年関東大震災の時は情報がない状況で噂とルーマーで民族差別と朝鮮人6千名あまりの虐殺、卑劣な犯罪を生み出した。今回の地震では皆が携帯電話等で地震速報と信憑性のある情報を得たので、比較的混乱がない秩序ある動きを見せた。排他的な態度全くなかった。

続いている強い余震でビルと竝木が揺れたが、余震の発生回数が段々少なくなったら急に寒さを感じた。足が不自由で寒さで震えていた私を心配していた仲間達は近所の安全な建物の居酒屋に連れていて水を飲ませ落ち着かせたし、慰めてくれた。

このような不安な状態で人々から慰めてもらうなんて本当にありがたかった。彼たちに感謝しながら、薬を飲んでテレビを見た瞬間、現実が見えた。M8.8（13日、マグニチュード9.0に変更）の巨大な地震が東京都東北地方に発生したのだ。根源時は私の妹が住んでいる、宮城の仙台、東京の北の地方だった。

妹が心配で急いで電話をかけたが、すべての電話が繋がらなかった。幸い、東京市内の公衆電話（NTT）は有線電話だったら繋がったが、携帯電話には繋がらなかった。通信途絶、ヘリとパトカーのサイレンの音、物々しい津波で廃墟になった町、まるで地獄みたいな状況だった。スマトラ大地震、ハイチ、ニュージーランド、続く地球の天災地変のなかで犠牲になる数多い生命たち、一国の力だけでは解決しにくい地球村全体の問題でもあるので、国家を超越した地球村全体の結束と協力ですべての自然に対処しなければならない時代なのをつくづくと感じた。

まもなく、津波が来るとニュースに報道されたので、小松会長と近所の会社へ待避しようとしたが、

39階の非常口を下りながら私は密閉されたビル建物に対する不信が強くなったので、浜松町からはなれて、地形が高いオープンされた空間に行くと言った。

立原局長も、私を心配してくれて、安心できるまで案内すると言った。

東京の地理を良くご存知でしたので、安心して案内をお願いした。

どっちみち、全ての電車、地下鉄等の交通機関が止まっている状態だったし、家に戻る方法は50キロほど歩くしかなかったのであきらめた。

しばらくレストランで休みながら、テレビを見て夕方になって寒くなったので、とりあえず近くの駅に行った。もしかして、タクシーでもひろえば、家に戻りたかった。ところが、駅前の食堂や居酒屋などは官庁の人々でいっぱいだったし、タクシーも見かけなかった。

「2編に続く」

2011年3月13日 李 修京